

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

大自然の猛威、それはかつて経験したことの無い大地震と津波であり、結果として原子力発電所の事故との三重の被害が東日本地方を襲った。

それは想定外ということで科学万能という人間の過信に対する警告ではないだろうかと考えるようになった。人間の力を大自然以上と考えるか、あるいは同等と考えるか、謙虚に大自然力以下と考えるとらえるかによって、その対応は根本的に異なる。

仏教の世界での人間観は、大自然の猛威に対して畏敬の念をもって対応する道を歩んできた。

今回の東日本大震災は、復旧が1年4ヶ月以上たっても遅滞として進んでいない気がしてならない。

それは、被災地の方々や復旧に日夜努力されている方々に対して、全く申訳けないが、科学万能という人間の価値観と過信に対し反省を求める警告ととらえるべきだと思考する。

そこで、仏教の世界での人間観を「九品凡夫、仏教の人間観」で学び知り考え、ともすると業や煩惱が、自己中心的な考え方になる無知、無明が凡夫の本性に起因する要因であること。

又、「貧者の一灯を考える」では、人間の娑婆世界では、好のむと好のまざるを問わず、差別が存在するという現実を見つめ、自分の与えられた立場における精一杯の倫理道徳観で対応する生き方を学び実践することの重要性を探究する。

大自然には人間以上の力があり、畏敬と尊敬の念で接してきた先人の叡智、いわゆる深遠な道理をさとりうる才知を求めた原始修験道ともいわれる自然崇拜と信仰を「山林抖擻行と木喰仏」で学び、昔の我が日本の祖先が如何に謙虚になって、これを磨き精進したか

を知り、大自然の猛威に対して恐れることなく、十二分の対応し、対処すべきかを探究することにする。

特に、山林抖擻行といわれる自然信仰、山岳信仰修行は、修験道として確立される以前の日本人の、大自然に対する物の見方、考え方による修行の世界であり生き方の歴史である。

そこには、科学万能におごれることもなく、大自然に対し、傲慢な人間観は存在せず、ただひたすら大自然に生かされている己れを知る生き方があり、自己中心的な業と煩惱による人間の本性は微塵も感じられず、木喰仏は、その特異な木彫仏として現代、各地に残こされて居り、人間の精神力の強さと、強靱な生きざまの歴史が感じられる。以下、先人の生きざまを学び困難に対応することだと思考する。

2. 九品凡夫、仏教の人間観

どうも最近の世の中の動きや、物の見方、考え方を見聞きするにつけて、お釈迦の教えが正しく伝わらずすべてが倫理なき社会の観がしてならない。

釈迦は己れの無き入滅後の千年間は正法時代とし、正しい教えが行われ、証果があり、次の千年間は像法時代とし、教えや考え方は存在するが真実の修行が行われず、証果を得るものがなく、最後の時代、いわゆる末法時代の1万年間は、教えがすたれ、修行するものも悟りを得ようとするものも無くなって、教法のみが残る時代がくると予言している。

最近の世の中の風潮は、言葉の通じない時代、いわゆる大変なディスコミュニケーションの時代になってしまった。それは、政治家と国民、団体と会員、企業と消費者、夫婦や親子等の家庭まで言葉の通じない世の中になってしまった。

人間社会に言葉が通じず、コミュニケーションがとれない地獄の世界がきたのである。

そこで、仏教の人間観について学び考えることにする。人間が住んでいる現象世界は、万物の本性は平等であるのに対して差別のすがたをとっている。

それは、人間に九種類の凡夫、いわゆる無明、無知な人がいるとして、差別が存在することを認めているのである。その九種類の凡夫とは、

上品上生者、上品中生者、上品下生者、中品上生者、中品中生者、中品下生者、下品上生者、下品中生者、下品下生者であり、人間がこの世に生をうけたときに上品、中品、下品の差別のあることを認め、釈迦の教えを学ぶことは無差別平等だとし、精進、努力して転生が可能だとしている。

しかし、人間のいる現実世界は業と煩惱の世の中で

著者：広島大学生物生産学部非常勤講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禪 禪 (野風生)
雅号 樹泉